



第7地区コミュニティ
新会長 宗方 隆

第7地区は皆さまの輪で地域の絆作りを目指します

私たちのコミュニティはまだまだ生まれたばかりですが、コロナ禍にあっても誇れるほどの活動を行っています。その内容は、1.学童の見守り(立哨、付き添い)活動。2.健康づくり(ラジオ体操/通年、夏休みの子供達)活動。3.環境美化(コミュニティ独自の清掃活動の実施)活動。4.会話や交流を楽しむ(コミュニティカフェの開設)などです。特筆すべきは今年度10月にコミュニティカフェが開設できたことです。気軽に集い、喫茶しながら会話や遊びに楽しい時間を過ごせる「大人

のたまり場」が提供できました。(上の写真参照)

地域の活性化は、一人ひとりのご協力があってこそ実現し、また安全や楽しさが得られると確信しています。それぞれ地域住民の皆さまの他人を思いやる心が、住み心地の良い地域を創っていくのだと考えています。そして日頃よりコミュニティ活動にご尽力をいただいている方々にお礼を申し上げます。これからも多くの人たちの輪で地域の絆作りをしてゆきましょう。

皆さまのご参加をお待ちしております。

コミュニティカフェ「いこい」オープン

古河市第7地区でコミュニティカフェ「いこい」が令和4年10月2日オープンしました(主催:第7地区コミュニティ)。初回の会場の「三和いこいの家」には高齢者や関係者ら、およそ70人が参加して実行しました。広場のテーブル席で飲み物を飲みながら談笑したり、輪投げゲームをしたり、ボランティア音楽バンドによる演奏も披露されるなど、和やかな雰囲気になりました。

コミュニティカフェは高齢者の“楽しみづくり”創出の一環としての取り組みで、様々なテーマで人と人が交流できる

場所、誰でも気軽に立ち寄ることができる地域の心地よいたまり場です。

独り暮らしの高齢者や高齢者夫婦などの地域住民皆さんを軸に参加を促しました。当日参加していた89歳の女性に「すっかり外に出る機会が少なくなりました。本当は誰かと、たくさんおしゃべりたいです。だから、コミュニティカフェはありがたいです。」と話してくれました。

今回、運営スタッフは全員ユニフォームのエプロンを着けて

忙しく動き回り、カフェを盛り上げました。

事務局では、社会福祉協議会と協力して、将来的には第7地区管内、3カ所(三和いこいの家地区、鴻巣地区、けやき平地区)を拠点に開催を計画しています。



第7地区コミュニティ清掃の取り組み

今年度から年2回のコミュニティ清掃始める

第7地区コミュニティでは、令和4年9月11日(日)に環境美化活動の一環として独自に「第7地区コミュニティによる清掃活動」を行いました。更に今後2回目を令和5年3月に実施する予定です。

「第7地区コミュニティによる清掃活動」を取り組むにあたっては、年度当初に第7地区会長会を開催し趣旨を徹底、依頼しました。参加の位置づけとして第7地区内の18自治会の手上げ方式によるボランティア活動としています。なおゴミ収集袋の提供と回収を古河市に要請しました。

清掃日当日はほとんどの自治会が参加し、朝8時からおよそ一時間かけて自治会内の公園敷地の雑草取りや樹木の剪定(せんてい)、伐採、歩道の草取りやゴミの収集などを行いました。中に

は、小さなお子さんを伴って、掃き掃除や草取りをする参加者の姿もありました。子どもたちに環境を守る事の大切さが伝わっていただけたと思います。

気持ちよく助け合い スッキリと清掃

このように、今年から取り組みを始めたコミュニティ清掃を絶やすことなくずっと続けて行きましょう。

第7地区コミュニティの宗方隆新会長は「ふだんから私たちの利用している歩道の雑草取りやゴミの収集活動をする中

で、住民の皆さんの十分な参加がなされていないことが少し残念に思うことですが、できるだけ多くの人の参加をお願いしたいのです。これからずっと私たちの居住する地域ですので、「気持ちよく、美しく暮らせるように」皆さんで協力し合いましょう」と呼びかけています。



福祉施設紹介

NPO法人 古河市障害児(者)支援の会 [希望]

地域活動支援センター みどりの家“夢”

当法人は、古河市心身障害児(者)父母の会の生活訓練グループが障害を持っている人、また、その家庭を支援することを目的に設立しました。その後、平成20年の法律改正によりNPO法人の認証を得て、新たに出発しました。

法人の目的は、障害者の自立と社会活動の参加を支援することにあります。現在15名の方がそれぞれの能力に合わせて活動に参加しています。



活動内容は、資源リサイクル、創作作業、生活訓練です。資源リサイクル事業では空き缶の分別・プレス、家庭やお店等からの古紙・ダンボールの回収を行っています。これらの売却代金をもとに通所者の方々に工賃を支給しています。この他に、レクリエーション活動、昼食会、調理実習、野外活動、各種イベントへの参加など、楽しみを取り入れ毎日の活動にメリハリをつけています。

現在、当法人の事業収入が低いいため若いスタッフの雇用ができないのが悩みです。現状はリタイアした人たちによって支えられています。

私たちの事業所はあまり目立たない所にあります。事業所の前を通った方もいらっしやると思いますが、気づかなかったでしょう。とても古い建物ですので見過ごしてしまうのではないのでしょうか。左隣は建物続きの「温泉施設」、右隣は「おおぞら」の施設です。

皆様、福祉の森会館にお越しの際には、ちよつとのぞいてみてください。会館のすぐ前ですから。

連絡先= 0280-48-7966

第7地区コミュニティへの参加組織紹介

古河市民でつくる 古河市消防団 第6分団の活動

古河市消防団は、古河方面隊・総和方面隊・三和方面隊による27の分団から構成されています。私たち第6分団は、昭和41年にそれまで鴻巣、新久田、坂間、鳥喰など、各町内単位で行っていた消防活動の一つにまとめてスタートしました。活動内容は火災や災害から地域内の市民を守る出動や、ポンプ車並びに機械器具の点検・訓練、各町内にある消火栓の点検、春と秋に行われる火災予防週間には各町内への巡回などを行っています。そして日頃より第7地区内の自治会の皆さまには、私たち消防団活動に多大なるご理解・ご支援を賜りとも感謝しております。

第6分団の活動範囲は第7小学校学区を管轄し、皆さまの生命・財産を守る



各町内の消火栓点検作業

べく活動しています。現在、団員の約8割が会社員であり市外への勤務者もいる中、迅速な火災や災害対応が難しくなっている現状と、社会情勢や意識などの変化から年々

団員の確保が困難になってきています。

近年、大規模な自然災害が多発していますが、地域の安全を守るため皆さまの力と行動力を消防団で活かしてみ

30年間 無火災の自治会 あげぼの台自治会

あげぼの台自治会は昭和54年に発足してから43年がたちました。会員数は146世帯です。毎年数件の入退会がありますが総数はほぼ横ばい状態です。

あげぼの台地区は第7小学校からセブンイレブン古河南店手前までの道路の両側にあり古河三和郵便局を中心とした地域になります。周りには緑も多く福祉の森や渡良瀬川土手河川敷も近いので、ご夫婦や犬と散歩する人たちを良く見かけます。

自治会の主な行事(現在はコロナ禍のため中止)は4月にお花見会の開催。毎年天気恵まれ弁当を食べながら桜の花を楽しんでいます。秋には茨城、栃木、埼玉県など関東近辺の日帰り旅行があります。12月は餅つき大会で子供からお年寄りまで3世代交流の場として和やかに催しています。これらの行事には毎回30人から50人ほどが集まり、参加者には喜んでもらっています。そし

ませんか。第6分団でも欠員があるため新入分団員を現在募集しております。

消防団活動にすこしでも興味があれば見学だけでも大歓迎ですので、ぜひご連絡ください。

090-1992-7219<落合まで>。



12月の餅つき大会で3世代が交流

て9月の敬老の日には70歳以上の方へお祝いにギフト券を渡します。毎年10名近く増えているので当自治会でも高齢化の波が寄せているのが分かります。また数年おきに防災訓練を行っています。平成31年2月には30年無火災行政自治会として市から表彰されました。

これからも市民総ぐるみ清掃等による環境美化活動を実施し、防犯や防災に努め安全で安心して暮らせる自治会にしたいと思ひます。

自治会町内会情報誌 “まちむら” に「けやき平自治会」の活動が掲載される

公益財団法人あしたの日本を創る協会*1発行の自治会町内会情報誌“まちむら”に「けやき平自治会」の寄稿記事が掲載されました。同誌は自治会・町内会等の地域活動を活発にするために、全国の優れた活動事例の紹介や、地域づくりの今日的な課題などを掲載。発行部数5万部の季刊誌で政府刊行物として取り扱われています。

今回の掲載は古河市では初めてで、

2022年6月発行の同誌158号に掲載されました。誌面では「けやき平自治会」のコロナ禍でのさまざまな取り組みを中心に、多世代間の交流について



地域安全見守り隊の高齢者と子どもたちの交流

具体的事例を挙げ、写真を交えて投稿したことが評価されたものと思ひます。

その主な内容は、①自治会独自のポータルサイト「キラボタ」の立ち上げで情報がクリアーに、②地域ミニコミ紙「けやきら!」を年3回発行して自治会員共通の意識を高める、③高齢者の地道な活動「地域安全見守り隊」の活躍、④子ども会によるラジオ体操の紹介(老人クラブとのコラボ)等、⑤将棋クラブ活動の紹介

(子どもから高齢者まで一緒に楽しむ)

古河市として、「けやき平自治会」の活動ぶりを全国で紹介する良い機会になったものと思ひれます。コロナ禍の中、自治会は何も出来ないような雰囲気ですが、「けやき平自治会」の活動が皆さまの活動に少しでもお役に立てれば幸いです。まちむら誌158号に興味のある方は「けやき平自治会」にお問い合わせください。

*1 公益財団法人 あしたの日本を創る協会

昭和30年に鳩山一郎首相の提唱により内閣府所管の財団法人新生活運動協会設立。昭和57年にコミュニティづくりを目標に掲げ財団法人あしたの日本を創る協会に改称。平成22年に公益法人制度改革により公益財団法人あしたの日本を創る協会に改称現在に至る。地域社会の健全な発展を目指し豊かで住みよいあしたの日本の建設に寄与することを目的として地域活動団体に関する育成・支援事業や地域活動に関する情報の収集及び提供事業、顕彰事業、相談・助言事業を進めている団体です。

第7地区コミュニティその他の活動報告

コミュニティカフェは 次年度も持続の予定!

福祉事業を行う第1部会では今年度、新たな取り組みのひとつとして、サロン活動の立ち上げを進めてきました。

古河市社会福祉協議会と協議を重ね、令和4年10月、三和いこいの家にて第1回コミュニティカフェ「いこい」をオープンしました。(1ページ参照)

会場の三和いこいの家を利用している周辺自治会を選定し、高齢者の皆さんに「家で過ごすのもいいですが、外に出て気軽にみんなとおしゃべりするのも楽しいものです」と声をかけて参加を募りました。

初回の10月2日は参加者70人程(関係者含む)が音楽バンドの演奏と輪投げゲームで盛り上がりを見せました。

11月6日の第2回目カフェでは本格的な輪投げ大会を催しました。約45人の参加者は2回投げた点数の合計点で競い合いました。輪投げの輪を握りしめて、標的の棒を見つめる姿は真剣そのもの。歓声やため息が会場のあちこちから上がりました。



真剣そのもので輪投げを楽しむみなさん

賞品や参加賞も提供するなど、参加者やスタッフが一体となって熱気にあふれたイベントとなりました。

コミュニティカフェは年内、12月でいったん終了しましたが、今年4月から開催場所を2カ所に変えて再開する予定です。

児童の見守り活動で ふれあいも生まれる

第7地区コミュニティの第2部会は防犯・防災の対応や対策にあたっています。現在はコロナ禍で水防の講習会などの取り組みを控えています。子どもたちの見守り活動を重点的に行っ

ています。

毎朝7時30分から8時前まで、各町内の交差点など地区内13カ所で立哨しています。緑の帽子にチョッキ、交通安全のたすきをかけて旗を持っている姿をみなさんも見かけるでしょう。

主に、火、水、金曜日に第7地区コミュニティの担当者が立哨に当たっています。朝は元気な子どもたちと「おはようございます」と挨拶を交わします。夕方にもすれ違った子どもたちから声をかけられる事もあるわけですが、見守り活動を通じて人と人との大切な交流やふれあいも生まれる事が実感できます。この見守りはいつまでも続けたい活動です。

光輝く高齢の皆様へ

穏やかに毎日を送っていきましょう

長寿日本一を目指す茨城県 ご老人のみなさん! 無理なく!!

全国の100歳以上の高齢者は、2022年9月15日現在で厚生労働省が発表したデータによると90,526人(前年比4,016人増)でした。

茨城県の100歳以上の高齢者は1,831人(男性209人・女性1,622人)ですが、これは過去最多を更新しました。昨年より138人増えたそうです。全国都道府県別では17番目です。県内市町村別では水戸市が183人、日立市が144人と続きますが、最高齢男性は北茨城市の108歳の外池信(とのいけまこと)さん、そして女性の最高齢者は石岡市の112歳の関しなさんです。

それではみなさん期待の古河市ではどうでしょうか。100歳以上の高齢者は昨年は54人でしたが、今年は64人(9月1日付)となりました。なんと、10人増、健康長寿に大貢献しましたね!

茨城県長寿福祉課は「県民の健康作りが進み、医療体制が整備された結果だ。『健康長寿日本一』を目指していきたい」と話します。

高齢者のみなさん、若き後継者に文化・歴史・生活に良き貢献をしていきましょう。

次に高齢者の巻の語録をご参考までに紹介しておきます。 長島 正義

「長生きの秘訣は笑顔と感謝」

「元気の秘訣は楽しい女子会」

「人間なんて、みんな似たようなサイクルだ。同じリズムで暮らし、毎日なにげないリズムで暮らす」

「なるようにしかならねえ、くよくよしたってどうにもならねえ」

取材した芸人・錦鯉いわく「長寿の人はマジでよくしゃべる!!」
(テレビ番組 健康長寿をのバス旅 10月11日・BS7の内容より)

編 集 後 記

高齢の方の中には、『コミュニティカフェ』とはいったい何だろう?と首を傾げる方もいるだろう。何を隠そう、筆者もその一人だった。だが、カフェのオープン日、その疑問が解けた。お年寄りたちの表情が、なんと生き生きしていることか。「外へ出て来てもらい、おしゃべりするだけでもいいんだ!」と教えてくれたスタッフの一言が胸にすんと落ちた。その裏側には、現代社会の高齢者の

孤独、孤立の実態が隠れているのであろう。望むべくは、ゆくゆくは老若男女、世代を超えたコミュニティカフェを追い求めてはいかがだろうか。

◇コロナ禍も4年目、終息への道筋は不透明ではあるが、基本的な感染対策を怠りなく!(澤)

◇編集委員> 長島正義、山口義美、桜井勝治、大澤一男